



令和2年度

鹿児島島の教育

10月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会中学校長部会副部長

鹿児島市立伊敷台中学校長
平 田 和 利

人の役に立つ喜び

今年も全国各地で豪雨災害等が相次ぎ甚大な被害をもたらしている。被災された方々の一日も早い復興を願うばかりである。熊本県でも厳しい暑さの中、復旧作業が続けられている。ボランティアは、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、県内からの参加者のみに限られた。夏休みに入り、地元の中学生も参加しているというニュースが飛び込んできて、心温まった。

鹿児島でも平成五年の夏、甚大な被害をもたらした八・六豪雨災害は、記憶に新しい。当時、私も自家用車で出水から鹿児島市へ向かう途中、国道三号線が通行止めとなり、入来峠を過ぎた郡山地区の坂道で車中泊を余儀なくされた一人である。午後十時を過ぎた頃、地域の方が、停車中の私たちに、ゆで卵の差し入れをしてくださった。ゆで卵は、空腹だった私の心をも満たしてくれた。このときの恩恵は、今なお忘れることのできない出来事の一つである。

うあるべきか、その道を成し遂げるために大志を抱け。」というものである。お金や名誉とかのために生きるのではなく、様々なことを学び備える事で、人のために役立つ大志を抱け、ということである。

また、今年二月に急逝した野球界の野村克也氏は、「人間的成長なくして技術的進歩はない」という言葉で、人間教育の先にしか個々の野球技術の向上はあり得ないとした。人は、家庭や学校で学んだことを社会に出て生かし、仕事を通して「世のため人のため」に生きていかねばならないということを指導の基本においていた。すなわち、自分の働きが周りの人に役立つことを経験している子どもは、困っている人を優しい言葉や思いやりのある行動で助けようとする。そして、誰かがやらなければいけないことに気づき、率先してやり遂げようとする。

令和元年度全国学力・学習状況調査の「人の役に立つ人間になりたいと思うか」の調査項目で「当てはまる」と回答した全国平均は七十・一％であった。我が校の結果はどうだったか気になる。叱られて動く種や物で動く種、ほめられて動く種などあるが、子どもの心には「人の役に立つ種」を植え、育てる教育を、家庭や地域と共に推進していきたいものである。

令和2(2020)年 10月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



霧島市の郷土史 天降川筋直しと山ヶ野金山

霧島市社会教育委員 有川 和 秀

天降川は国分平野を錦江湾へと注ぐ霧島市の母なる川です。各流域で田を潤し子等の遊び場ともなりました。隼人国分辺りでは新川と呼び、約三百年前に工事し造られた川です。

江戸の前半、各藩増産に取り組み始め、薩摩藩も灌漑事業に力を入れ始めました。天降川水系では、寛文二年（一六六二年）から四年かけ「国分川堀」、所謂「天降川筋直し」が行われました。氾濫を繰り返していた天降川の下流約三キロメートルを海へ真つ直ぐな川に直す工事でした。旧川跡は松永溝を引き五千石の田になりました。

大型の機械動力のない時代、こんな大土木工事がよく出来たものです。台地をどう掘通したのか、掘った土砂をどこへ運んだか、川の堰き止め方は等の疑問に、「天降川筋直し研究会」では、地下に隧道を通し土砂を海に流し込む水搬工法が取られたとの説を立てられました。

今、両岸にはホテルや工場、それに公共施設、大型店舗が連なります。郊外へ田が広がり、川沿いでスポーツや散歩も楽しめます。天降川の橋から堤防や流れを眺めると、三百年前前の治水工事とそのご苦労が偲ばれます。霧島連

山を向こうにここは我が山河なりの思いです。

天降川を遡ること三十キロメートル、始良北部国見岳が源流です。ここから横川・牧園の流域は金山川と呼ばれます。この源流域に日本屈指の山ヶ野金山があり、それに因んだ川名です。

霧島市横川町山ヶ野は、昔の金山町集落です。坑道跡や役所跡石垣の街並が残り、私たちが昔の金山町の世界に誘います。ここ山ヶ野金山が、天降川筋直し工事に大きく係わりました。

山ヶ野金山の発見は、寛永十七年（一六四〇年）。鉾区は、現在のさつま町永野、湧水町国見、霧島市横川山ヶ野に跨り、囲い約三里の中でした。発見されると藩内外から二万人が集まり操業しました。ところが一年程経つと幕府は操業停止を命じました。驚いた薩摩藩は再開を願いました。十三年間許されませんでした。明

暦二年（一六五六年）に再開が許され、それから昭和二十八年まで三百年余りの操業が続きました。この年数を見ても大きな事業経営であった事が分かります。その間の金銀生産量は凡そ八十トンとされ、藩の財政を大きく支える金蔵でした。明治以降は島津家の鉾山として操業されました。

略 歴

- 二〇〇一年 横川町立安良小学校校長退職
- 二〇〇一年 横川町教委社会教育指導員
- 二〇〇一年 山ヶ野金山文化財保護活用実行委員会専門委員
- 二〇一七年 霧島市文化財保護審議会委員

古記録（山ヶ野金山御取建之由緒）に「御利潤ヲ以御払有之候、同（銀）百三拾七貫目余・国分川堀並清水新溝堀」とあります。この金目は小判で二千二百九十兩程（四億五千万円程）です。金山利潤が国分川堀等に大きく資金として充てられました。また川筋直しや圃場整備の企画指導に当たった人たちは、山ヶ野金山草創の経営者たちでした。金山発見や金山奉行をした島津久通は惣差配役の家老。国分郷地頭の喜入久右衛門、工事河渠司副の大山三郎右衛門等（金山萬覚）も経営役で金山の技術を熟知した人たちでした。そんな訳で金山技術や技術者（山師）投入もあったと見えています。天降川の上流と下流にはこんな妙味の歴史がありました。

山ヶ野金山地区では、山ヶ野金山保護活用実行委員会を中核に、毎年「黄金の郷山ヶ野ウォーク」を実施して十九回になります。横川中生徒の史跡案内に参加者は称賛の拍手をくださいます。町内小学六年生は全員招待参加です。横川は厳しい過疎状況ですがへこたれてはおれません。誇りある郷土歴史の顕彰と地域の元気を目ざし活動しています。活動メンバーの一人として、この小中学生の皆さんが、横川の歴史を誇りに思い、やがて地域づくりや地域貢献に取り組まれますことを切に願っている次第です。



経営参画意識の高揚と 積極的な職員マネジメント

高田小(南) 国 料 雄 一

一 はじめに

「職員がよりよく変われば、子どもはよりよく変わる」そのとおりなのだが、全職員をよりよく変えることはなかなか難しい。校長としての九年の取組を基に振り返ってみたい。

二 モチベーションの向上

職員をやる気にさせること、その気にさせることが一番大事である。しかし、これがなかなか難しい。職員には一人一人のタイプがあり、ほめればモチベーションが上がる人もいるし、誰かと競わせることで向上するタイプの人もいる。その特性をきちんと見抜き、それぞれに応じた係わり方をしていかなければならない。

三 コミュニケーション

仕事をする上でコミュニケーションが取れないとお互いの思い違いを招いてしまう恐れがある。校長と職員のコミュニケーションは難しいところもあるが、意志の疎通が図れるようにしておく必要がある。私は、年度当初の会議で、次の「心をそろえる五段階」を話すとともに、自分から心を開いて会話をする

ように心がけている。

【心をそろえる「わ」の五段階】

我（一人一人の個性）↓話（話すことでお互いを理解）↓和（仲よく）↓輪（一緒に）↓把（共通実践）

また、先輩教師の豊かな経験を伝承するために、茶いっぺコミュニケーション（本音で語る井戸端会議的な時間）を取り入れ、チームワークを築くようにしている。

四 積極的な職員マネジメント

一人一人の職員が、自らの能力や個性を發揮し取り組むとともに、組織全体として有機的に高め合える集団になることが望ましい。そのために、校長として次のようなことが大事だと考え実践してきた。

- (一) 職員の適性、興味関心を的確に把握する。
- (二) 傾聴的態度で職員と語り込み、目標をもたせる（将来を見据えた指導・育成方針）。校務、教科の専門性、それとも：職員に自らの成長ビジョンを描かせるとともに、校長としての育成ビジョンを語り、具体的な姿として共有したい。
- (三) 信じて任せる（自己実現できる場を与え

て活かす＋見守りとサポートが大事）

「思い切ってあなたのやり方でやってみゃん。」上司のこの言葉が何回ともなく私の背中を押し、自信を付けてくれた。

(四) 認め称賛する（評価とフィードバック）

「褒められたい。」という承認欲求は職員も同じである。的確かつタイムリーな承認を心がけている。直接声をかける、付箋メモを机の上に貼る等が多いが、次の二つは職員にも好印象である。

(ア) 校長室だより（思料たかた）

毎号のリード文に「今週のキラリ」を書いている。内容は、職員や子ども等のよさである。直接名前を出さないものの、誰（何年生）のことか分かるので、いい刺激になっている。もちろん全ての職員・学級を掲載することが目標である。

(イ) 元気の出るコメント

通知表決裁時の担任一人一人への校長からのコメントである。取組のよさを認め、労をねぎらい、次の学期へのやる気を高める重要な役割をもつ所見である。

五 おわりに

山本五十六の名言「やってみせ 言って聞かせてさせてみて ほめてやらねば人は動かじ」の後には「話し合い 耳を傾け承認し 任せてやらねば人は育たず」「やっている姿を感謝で見守って 信頼せねば人は実らず」と続く。この教えを胸に、職員一人一人のやる気に火を付けたいと考え、毎日を過ごしている



「子ども理解」を核にした

対話による授業研究

戸口小(大) 高 司 聖保美

一 はじめに

本校では、同僚性・協働性を高める仕掛けとして校内研修の充実に取り組んできた。関係の主導のもと、全教職員が授業を提供したり、外部研修の学びを積極的に還元したりする機会を設け、共に学び合う雰囲気醸成されつつある。校内研修こそがよき学びの場となっている。

以下、ここに至るまでの研修系の熱意と本校の取組の一端を紹介して提言としたい。

二 授業研究のスタイル

係がミドルリーダーとしての力量を発揮し、教職員への意識調査から課題を分析して、基礎研究を始動した。先行実践の成果を生かしつつ、「授業研究が、授業者の指導力を高めるだけではなく、観る側の主体性を促し、協働性を構築するものに。」という新しい形が提案された。

観る側の主体性、その先にあるのは「子ども理解」である。授業を観察し、評価や憶測を入れないで、子どもの学びの姿(事実)を基に、対話や意見交流を行う方法である。新学習指導要領の趣旨を踏まえた「学びの主体を子どもに」という授業観への転換でもある。

三 子どもが主体となる授業「ゴールとぐち」

主体的・対話的で深い学びを視点とする授業改善は学校教育目標の具現化でもある。子どもが主体となる授業づくりとして、次の四つの場面で重点的に検証し、子どもの反応や言動から内面過程(認知・情意)を把握した。

・**Go** ゴールイメージ時間

(学習のゴールの設定と見通す活動)

・**ど** 友達と一緒に取り組む対話時間

(理由や根拠を明確にした対話活動)

・**ぐ** ぐつと深く理解する自分時間

(考えを再構築する言語活動)

・**ち** チェック・チャレンジ時間

(振り返り活動(学びの可視化))

教師の「教えたい」を、一人一人の子どもの「学びたい」に変える工夫は容易ではないが、授業者と観る側の協働で生まれた「手立て」の多様性は、子どもを理解する力量を高めた。

四 教師の学び合いのモデル

(一) 共通の課題意識をもつために、日頃の授業の様子をタブレットで撮影・観察し、話合いの論点と抽出児童を明確にしておく。

(二) 研究授業を参観し、授業中の子ども

の姿や言動等の事実を付箋紙に記録する。

(三) 授業研究で、子どもの事実に対する確認・分析を通して、授業を観る側が学ぶ。

(四) 授業研究の対話を通して、授業の良い点を授業中の子どもの姿から根拠付けて解釈し、普段の授業で共通実践していく。

五 主体的に参加した充足感(成果)

本校職員への意識調査によると、「校内研修の充実感」「研究授業への積極性」「研修が指導力に与える影響」の項が大きく伸びている。記述欄にも「この研修スタイルになってから、子ども一人一人に目を向けた授業づくりを意識するようになった。」「子どもの学ぶ姿に焦点を当てて観察・対話することで、子どもの特徴や思考に気付くことができた。」など、授業研究に主体的に参加した充足感が記されていた。

六 おわりに

「まな板の鯉みたいな気分…」これは、研究授業を行った先輩教師の授業研究での第一声である。当時は熱くほろ苦く思い出される。あれから数十年、時代も社会も大きく変わった。

学校教育における課題も複雑化・多様化・高度化した。課題山積の現状にあっても、教師にとって「授業力」は必須である。

子どもが主体性を発揮できる授業づくりには、教師一人一人が自律的に取り組み、同僚性・協働性を維持して前進する学校組織でありたい。



組織と連携を生かした学校経営

国分西小(始) 柏原 浩一

一 はじめに

本校は、平成二十一年に児童数が一千名を越えたのを境に、広瀬・福島の二大自治会を分割する形で新設天降川小とに分離され、現在児童数六百五十三名で創立六十八周年を迎えている。合い言葉「明るいあいさつきれいな学校」のもと、教児一体となって清掃活動等や教育活動に取り組んでいる。

二 学校教育目標の具現化

令和二年度よりこれまでの学校教育目標の「人間尊重の精神に立ち、知・徳・体の調和のとれた発達を目指し、自ら学び、自ら考え、心豊かでたくましい国分西小の児童を育成する」を教育指標とし、新たな教育目標を「夢を育み、感性と個性を伸ばす教育を推進する」と設定し、その具現化に努めている。

三 「自ら学ぶ児童」の育成

「確かな学力」の向上を図るために、すべての児童に、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させる。それらを活用して課題を解決するために、思考力・判断力・表現力等の能力を育み、主体的に学習に取り組む態度を養う。この到達目標の実現に向け、校内研

修と学力向上推進委員会の連動を図るとともに、「思考力・判断力・表現力の育成」「学習評価の工夫・改善」の取組を全校体制で推進している。

また、文科省・厚労省指定の「放課後等福祉連携支援事業」を継続推進している「特別支援教育」やキャリア・パスポートを活用した「キャリア教育」等の視点を重視しながら、日々たゆまない営みを継続している。

四 「自他を大切に作る児童」の育成

児童一人一人に豊かな心を育み、自らの人生をよりよく生きていける資質を育むことを目標に、美しいものに感動するなどの豊かな情操、善悪の判断などの規範意識に特に重点を置いて指導している。

その充実に向け、また考える新たな道徳の授業を組織的に実践していくために、研究テーマを「自己の生き方について考えを深められる道徳指導法の在り方」と設定し、道徳的な心情や判断力、実践意欲や態度などの道徳性を培う人権教育や道徳教育を、学校の教育活動全体を通じて計画的・発展的に指導できるよう取り組んでいる。

五 「最後までがんばる児童」の育成

学校敷地内の桜並木の清掃は、伝統的なボランティア活動としてその教育効果は高く、汗水流して取り組む姿は素晴らしい。

心と体を一体として捉えた健康の保持増進並びに体力の向上を目標に、体育・健康に関する指導を、児童の発達段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行う。特に、食育の推進並びに体力の向上に関する指導、安全に関する指導及び心身の健康に関する指導については、体育の時間はもとより、家庭科、特別活動においてもそれぞれの特性に応じて適切に行うように努め、健やかな体の育成に資する。

とはしているが、その目標の実現に向けた学校保健委員会の開催そのものも現状では厳しい。コロナ禍のなかで健康教育の充実、体力の向上は新たな視点を持って取り組まなければならぬ大きな課題となっている。

六 おわりに

この夏、全職員で図書システム導入に伴い、蔵書のデータベース化に取り組んだ。なかなか思うようには進まない。PTA活動も思うようにできない現状の中、研修部の皆さんが作業に加わってくださるという自主的な申し入れがあった。奉仕作業後には、役員の皆さんの配慮で、かき氷を提供してくださり夏祭り気分を味わえた。

今後もPTAや関係機関等との連携を深め、今できることに全力で取り組んでいきたい。



自律を育てる学校経営

いにしえの自治的教育法に倣った活動

和泊中(大) 上久保 大介

一 はじめに

本校がある沖永良部島は西郷隆盛が流刑された島であり、和泊町は西郷隆盛が座敷牢で島民や子どもたちに学問を教えた地である。島の人たちは死を覚悟した西郷隆盛のために尽力し、その教えを受けたことに誇りをもっており、現在でも西郷南洲顕彰会を中心とした活動が盛んに行われ、その業績をたたえている。このような地にある和泊中学校は生徒数一六三名で、地域に見守られながら地域の中の学校として、教育活動に取り組んでいる。

二 生徒の実態と教育方針

本校の生徒は素直で挨拶も良好だが、発表や活動においては消極的な傾向がある。これは、学習面においても同じで、進路先の選択肢の少なさや島内での刺激の少なさも相まって、学習に対して消極的な面があり、他の活動も深く考えずに行動する傾向がある。

そこで、本校では学校教育目標である「自分の夢実現に向けて、今行動する和中生を育てる」の実現を目指し、生徒が「自ら考え、正しく判断し、すぐ行動できる人間の育成」に取り組んでいる。

三 本校独自の活動

(一) 生徒会主催の朝ラン(朝ランニング)

かつて、本校では生徒指導の問題や遅刻者が多い時期があった。そこで、生徒の自浄能力を高め、生徒指導問題を解決するための方策として、生徒会が中心となり朝ランニングを日常の活動として始め、十年経った現在も続いている。生徒は一年を通じて、七時三十分から十五分間の朝ランに取り組んでおり、その後は八時までのボランテニア活動を行っている。教師も半数以上が生徒とともに走り、汗を流しており、本校の伝統となっている。

(二) 高校生や先輩が指導する「和の中郷中」

西郷隆盛も行った薩摩の伝統的な縦割り教育「郷中教育」に倣った活動である。年二回行っており、一回目は三年生一人が一年生三〜四人のグループに数学と英語を教える活動で七月に行っている。二回目は、すでに進路が決定した地元の高校三年生を招き、自宅学習の時期である二月に実施している。このときは、本校の二年生四〜五人のグループに高校生が一人つき、数

学が英語を選択し、教えてもらっている。歳の近い先輩に教えてもらうことにより、いつも以上に真剣な取組が見られ、教える側も教えられる側も充実した活動となっており、学習に取り組む真剣な雰囲気作りになっている。

(三) 考える習慣を身に付けさせる「IICCT」積極的な発言を促すためには、自分なりの明確な考えを持たせ、自信を持たせることが大切である。本校では、自ら考える力を身に付けさせるため、帰りの会の余った時間を活用し、課題に対して三分間で自分の考えを記入する活動を行っている。この活動は「発想を豊かにし、想像力や創造性を高める」という趣旨から「Idea Imagination & Creation Time」略して「IICCT」と名付けた。なお、この活動は職員が発案により、本年度から研究との関連を図り、毎週木曜日の朝読書の時間から五分間を使い、さらに深まりのある活動へと変更した。

四 おわりに

教育活動は職員一人一人の意識の高まりと活性化された行動により、その効果を発揮する。教師の日々の姿が生徒の活動に反映するという考えのもと、職員自らが「考え、正しく判断し、すぐ行動」するよう、全員態勢で教育活動にあたっている。

今後も、西郷隆盛が「敬天愛人」の思想に至った地であることを胸に学校経営にあたっていきたい。



互いの良さを認め合い、 思いを深め合う人権教育

平出水小(始) 川 崎 孝

一 はじめに

本校は、大口盆地の北に位置し、夏場の寒暖差が大きく、米作りに適した環境のもと伊佐米が美味しいところである。

私が赴任した平成三十年度は、児童数九人の極小規模校であり、前任者が特認校制度を取り入れたばかりであった。そして、本年度は児童数二十二人となり、完全複式ながら特別支援学級も二学級増えて五学級となり活気が出てきた。小規模校から大規模の中学校へ進学する子どもたちに、一人前の力を付けさせ、良好な人間関係を築けるようになることを目指して表題のテーマを掲げて実践を通してた研修に取り組んでいる。

二 取組の実態

(一) 人権が尊重される授業づくり
子どもに自己有用感をもたせる支援や主体的に取り組む授業を構成することで、自分の大切さと共に他の人の大切さを認めることができるのではと考えた。そのために、「つぶやきや表情から学習課題の理解の程度をとらえ、意図が掴めるように個別に支援する」「互いの発言を最後まで聞く態度や誤答を大切にする意識をもたせる」など、学習過程ごとの指導上のポイントを設定し

た。研究授業を通じた主体的な研修を深めることで、学力向上にも繋がると考える。極小規模校の良さである一人一人に細かい配慮をすることで、特認校のPRにも繋がる実践になると期待している。

(二) 人権が尊重される人間関係づくり

自他の良さを認め合い共感的理解を育む活動や自己表現の場を設定することで、望ましいコミュニケーション能力の育成が図られ、より良い人間関係を築く力を身に付けられると考えた。具体的には、『キラリのもみの木』として、「私のキラリ」に自分が現在頑張っていることを書き、それに他の児童と教師の一名ずつが共感的なコメントを記入する取組を毎月一回くらいずつ行っている。具体的な目標設定と周囲からの声かけや見届けにより、より一層自尊感情を高め、関係性が強くなっている。

また、認知機能強化トレーニングとして「コグトレ」の取組を始めた。本校では、ここ数年特別支援教育の取組に重点を置いている。社会面、学習面、身体面の三方向から子どもを支援する包括プログラムを参考に、朝や午後の十分程度を利用してトレーニングを行っている。「覚える」「数

える」「写す」「見付ける」「想像する」五つの分野からなる内容である。短時間に集中して楽しく取り組める効果が子ども自身にも実感できるものと期待している。

(三) 人権が尊重される環境づくり

人権環境を整えたり、人間関係を深め安心して生活・学習できる場づくりに努めたりすれば、自分の大切さと共に他人の大切さを認めることができるのではないかと考えた。特に、行事や集会の際に感じたことをその場で発表し合うことで、自分自身の考え方を深めたり、他人の意見を聞いたりして考えを深めることに繋がっている。また、地域の青パト隊に見守られながら登校する子どもたちは、「立ち止まって、先手、呼名あいさつ」に取り組んでおり、感謝の気持ちなども自然と身に付いている。さらに、特別支援学級開設や特認校制度による転入生を迎えて、異なる価値観やお互いの違いをしっかりと受け止める態度が育ってきていると思う。異質なものを拒む態度が、人権教育の中でも課題となるが、小学生の段階から体験的に学ぶ機会があることによつて、自分も周りも大切な存在として考えられる輝く子どもたちに成長してほしいと願う。

三 おわりに

児童数減少や特別支援教育は、今や多くの学校での課題である。本校でもコミュニケーション・スクールの重点として、児童数減少の対策に取り組んできた。子どもたちが「学校が賑やかで楽しい」と感じてくれるように、学校の魅力を高め情報発信していくことで、地域と共に今後の発展に努めていきたい。



活力にあふれ、自己実現に向けて

邁進する学校を目指して

鹿児島南高 石田尾 行 徳

一 はじめに

本校は、昭和二十三年に谷山町立谷山高等学校として開校した後、昭和三十一年に「県立谷山高等学校」、さらに昭和四十三年に「県立鹿児島南高等学校」と改称され、今では進学や就職、資格取得や部活動において県内屈指の実績を誇る鹿児島南部の高等学校である。

現在、本校には、国公立大学や難関私立大学の合格者数を年々伸ばしている普通科、国家試験や各種検定で多数の合格者を出している商業・情報処理科、体育・スポーツの指導者や、全国ひいては世界で活躍する選手の育成を目指す体育科と、四つの学科が設置されており、それぞれの学科が独自の特色を出しながら日々切磋琢磨している。

本年度は、九百三十九人の生徒が、本校で自己実現へ向けて邁進している。

二 取組

(一) 文武両道を推進するために

生徒一人一人の学力向上を図るために、授業態度の見守りや成果の見届けをするるとともに、学力レベルに応じた指導内容と課

題の精選を徹底している。

具体的には、普通科の朝課外や七限授業及び土曜セミナー、商業・情報処理科の各種検定及び検定前補習を実施している。

部活動においては、個々の進路実現に向け、学習時間の確保や学力の定着を図るとともに、日々の練習に加え、練習試合や合宿等を計画的に行うなど、練習の質と量を確保することで、高い競技者意識の醸成と競技力の向上を図っている。

これらの授業、学校行事、生徒会活動、部活動やボランティア活動など、生徒が高校時代に経験する校外での全ての活動を変化の激しい時代を生き抜くために必要な二十一世紀型能力育成の場と捉え、同一の評価規準表(ルーブリック)を用いて、生徒自身の自己評価(リフレクション)や教師側からの支援(ファシリテーション)を行っている。

(二) 生徒が目標に向けて努力するために

早期の目標設定や必要な準備に取り組ませるため、望ましい勤労観や職業観を育成するためのキャリア教育を推進している。

また、学力の定着や各種検定の資格取得に意欲的に取り組ませるために、常時アンテナを高くしながら、最新かつ有用な進路情報を提供している。

(三) 鹿児島南プライドを持たせるために

体育祭での集団行動や各部活動や各科の特色が色濃く出る文化祭、学科学年対抗でのクラスマッチ等の学校行事を通して、学科を超えた一体感を味わうことで愛校心や母校愛を育成するとともに、服装指導や交通指導等を通して、本校生としての規範意識の醸成を図るなど、品格ある人間形成に努めている。

三 おわりに

新型コロナウイルスの更なる感染拡大が懸念される日々が続いている。

ペスト、コレラ、スペイン風邪、新型コロナウイルスと、偶然かどうか分からないが、約百年周期で襲ってくる感染症。

現段階では、世界中で多くの感染者を出し、日本においても感染拡大のリスクに置かれているが、人類の叡智は必ずやこの事態を収束させ、長かった夜が明け、降り続いた雨も止む時が来るだろう。そして、その後に雲間から覗く陽光は、やがて大きな虹を照らし、子どもたちの輝く未来を彩ってくれると確信している。

来たるべき未来に向けて、今後ますます教育活動の歩みを力強く推し進めたい。



「おまえには技術がない」

西目小(北) 徳丸 佳大

「おまえには技術がない。」

教員一年目の夏、中学時代の恩師と八年ぶりに再会した。我々教え子に囲まれた恩師は冒頭、上機嫌だった。子どもたちと楽しく遊ぶ現況を嬉々として語る我々を案じたのだろう。かんで含めるように教師道を熱く語り始めた。

「教師にとって大切なことは『情熱と若さと技術』子どもたちと遊ぶのはいい。喜ぶだろう。おまえには情熱と若さはある。しかし、技術がない。これは自分で日々学ぶしかない。研究教科を決め、先輩の授業を見て、よいものを取り入れて技術を磨くしかない。まず、守破離の守だ。十年後を見すえて今すべきことに全力をあげよ。」と語り、若かりし頃の失敗談も話された。

的を得た言葉だけに素直に受け止め、これまでに恥じ、聞き入る自分がいた。他の三人も同じだった。

私の授業を直接参観されたことはなかったが、中学時代三年間の数学担当として私の性格も熟知している。話す内容から甘さを感じ取り、将来を案じられたのだろう。学生の延長のまま勘違いしていた一学期を素直に振り返り、これからの自分のあり方を考えながら歩をすすめた帰り道だった。

それから県を超えた研究会にも参加させてもらい、様々な優れた指導技術を試してみるようになった。今の自分があるのは恩師の言葉に目を覚まされたおかげである。

七・八月に、かつての部下が我が家に立ち寄った。現況を報告し、将来を語った。若手教師と杯をかたむけつつ、恩師に頂いた言葉をさりげなく語る自分がいた。

どの職種にも、どの立場になっても通ずるもので自分を諫めてくれる珠玉の言葉だ。

先生はお元氣だろうか。今の私を見てどんなアドバイスを頂けるのだろうか。校長論も語り合いたいものだ。今は帰省できる状況ではないがいずれ挨拶に伺おうと思う。

誠実にひたむきに

秦野小(隅) 二川 武治

「『いい人』でいても報われることはない。」(事なかれ主義のつまらない人間になつてはいけない。立派であるうとして背伸びしなくてもいい。身の丈をわきまえ、誠実にひたむきさがあれば部下はついてくる。) (某市の教育次長さんの言葉)

これまで数々の先輩や同僚から、励ましの言葉や視野を広げてくれる助言、心が潤う言葉、叱責などを頂いてきた。その度に自分の生き方を改め、自己形成を行うことができたと感謝しているが、執筆項目の「心に残るひとこと」と問われたとき、真つ先に思いついたのが冒頭の言葉であった。

自分に自信がもてなくて、常に周りの目を気にしながら実践しているところがどこかにあつた気がしていたので、「身の丈をわきまえ、誠実にひたむきさがあれば……」の言葉に出会い、救われる思いがした。

もう一つの要因として、講話をされた方の人間的な魅力(ひたむきに実直に生きていらつしやる姿)にも魅了され、自分もそうありたいと憧れに近い気持ちも芽生え、新たな意欲をも

たせてくれた言葉である。

講話の中では、「管理職として組織にどう向き合うか。」というテーマで話されたので、私
が気付いていない多くの示唆に富む話ばかりで
あった。

今でも、講話の中で使われたレジュメは私の
宝物である。その宝物を時々読み返ししながら、
自分の在り方を振り返ったり、新たな気付きを
頂いたりしている。

講話の最後に話された「くたびれた中古車よ
り、格好いいクラシックカーを目指す。」私も
教員人生が残りわずかとなってきた。置かれて
いる状況の中で、自分の軸をしつかりと見据え
て、粘り強い実践になるよう更に努力していき
たい。



「イネ」

吉田南中(市) 向 田 伸 子

(私ごとで誠に恐縮ですが・・・)
実家の母方の祖母の名は「イネ」。

既に故人だが、明治の女らしい芯の強さを
もった人だった。この祖母から幼い頃によく聞
かされたことは彼女の名前の由来であった。

「実るほど頭を垂れる稲穂かな」

稲が成長すると実を付け、その重みで実(頭)
の部分下垂れ下がっていくことから、立派に成
長した人間、つまり人格者ほど頭の低い謙虚な
姿勢である、という意味の諺である。

私(祖母)の名はそんな願いで付けられたも
のだということ、あなたにもそんな人間になっ
て欲しいということ、などを話し出すとその時
間はこれまた長く、懇々と聞かされた。幼い頃
の私は、「あゝまた始まった」というぐらい
の思いで、あまり深くも受け止めずその時間を
やり過ごしていたように思う。

そんな祖母は高校の家庭科の教員であった。
私が教員になったことを人一倍喜んでくれたし、
「教員になったら袴を着ることもあるだろうか
ら。」と、あの頃七十歳は過ぎていたであろうが、
緑色の袴を拵えてくれた。祖父は私が一歳ぐら

いの時に他界しているが、教頭として出張して
いた広島で、脳溢血で倒れそのまま命を落
としたらしい。そのため、私が管理職になった
ことに実家の母は何か強い縁を感じていて、実
は人知れず喜んでいたようであった。祖父は、
バイオリンや尺八など数多くの楽器演奏を趣味
とする高校の歴史の教員だったらしい。私には
祖父の記憶はないが、何となく守られている感
覚は味わっている。

今となっては、卒業式にもなかなか出番がな
くなった袴であるが、箆筒を開けると俄にあの
時の祖母のことが蘇る。

「実るほど頭を垂れる稲穂かな」

教員生活も残り少なくなってきた。今こそ自
身への戒めのことばとしたい。



みんな、かかれー

鹿屋工業高 末 吉 成 人

平成二年三月一日、天気は快晴、出水工業高校卒業式終了後、体育館前で生徒や保護者との記念撮影終了直後に担任の私を校庭で生徒が取り囲み、学級総務が発した言葉である。新規採用教員として赴任した最後の二年間はこのクラスの正担任として持ち上がり、教師生活初めての卒業式の日の出来事である。

これまでの間、頭髮指導では頭を坊主にしない生徒と一緒に坊主にしたたり、定期考査の一週間前は毎日放課後に生徒を教室に残して日替わりメニューで教科の補習をしたり、問題行動が多くて、家庭訪問記録簿は私が年間通してダントツの一位だったので、PTA総会後の学級会は視聴覚室で生徒と保護者と一緒に実施したりと、とにかくこのクラスは問題が多かった。時はバブルの絶頂期で、大学時代の友人は就職してすぐにいい車に乗っていると、数年後にはマンションをローンで購入したとかなど羽振りが良い話が飛び交っていて、当時の職員室で同じ若手教員と本気で民間企業への転職も考えたこともあった。それでも、全員無事に卒業させるんだという強い思いだけは人一倍持っていた。

たとはいえ教師としての力量に乏しい私は、ただ毎日が必死だった。

そしてようやく迎えた晴れの卒業式後の記念撮影終了後に事件は起きた。学級総務の「みんな、かかれー」のかけ声とともに生徒に囲まれた私は正直、袋叩きにされることを覚悟して全身が固まっていた。そして、ふと気がつくとも私の体は生徒たちに胴上げされ、何度も何度も宙を舞っていた。その後、学級総務に聞くと、予めみんなで話し合っていたと言う。そして、その時に彼が僕に言ってくれた言葉は「先生が僕らの担任で良かったです。」その言葉のおかげで私は教師を続けられて今の私がある。後にその時の胴上げの写真カメラマンの方から頂いた。それを見るたびに民間企業に再就職しようかと目論んでいた未熟な自分を恥ずかしく思うと同時に彼の一言が思い出されて目頭が熱くなるのである。



ある日の校長講話

継続は力なり



里小(北)榎 元 寛 之

皆さん、おはようございます。今日は「継続は力なり」というお話をしたいと思います。

まず、笑い話をします。

小坊主さんはお腹がすいたので、まんじゅうを食べました。一つ食べてもお腹がいっぱいになりません。二つ目を食べてもだめです。三つめを食べたらお腹がいっぱいになりました。そのとき、小坊主さんが、「なあんだ、三つ目のまんじゅうを最初に食べればよかった。」と言いました。

さて、この話を聞いて何か変だと思いませんか。本当に三つ目だけでお腹いっぱいになりますか。お腹がいっぱいになるには前の二つが大

事なのは分かりますね。仮に逆上がりでの練習を千回して、千一回めにできたとしましょう。千回の練習があつたからこそできるようになったことは言うまでもありません。

努力を続けなければ何事もうまくいきません。努力とは理屈ではなく実行することです。自分の目標をしっかり持って、頑張つて続けてみてください。「継続は力なり」です。

先日、市の小学生綱引競技大会がありました。市内のほとんどの学校が参加しての大会で、里小からは六年生が参加しました。昨年五、六年生で参加したとき準優勝で敗退した悔しさをバネに、今年は優勝を目指して練習に取り組みました。けがもしました。まめも破れました。激しい練習に体も悲鳴を上げました。それでも、みんなが一つになって毎日毎日綱を引き続けました。結果は準優勝。涙も出ましたが、やり遂げたという満足感がありました。途中でへこたれず「継続は力なり」を率先して示してくれた六年生。本当によく頑張りました。感動をありがとうございます。



私の宝物

早町小(大) 長 田 正 浩

みなさんは、自分の宝物を持っていますか。今日は、私の宝物を紹介します。

これは、私の宝物です。何だと思えますか。実は、私が小学三年生の時に書いた詩や作文です。私が小学三年生というところからおよそ四十八年前です。みなさんはもちろん生まれていませんが、みなさんのお父さんやお母さんも生まれていなかったかもしれません。三年生のお友達、手を挙げてごらん。私があるなたちと同じ年に書いたものです。その中の一つを紹介します。

「題 お父さんへ」

三年 長田 正浩

「お父さん。中学生になったら、じゅうどうぎを買ってね。ぼくは、中学生になったら、じゅうどうぶに入って体をきたえようと決めました。そして、じゅうどうをして日本一になりたい。」

お父さんを見ているとかわいそうになります。ほくす。まい日、まい日はたらいしています。ほく

も大人になったらそんなになるのだろう。」聞いて、どんな感想を持ちましたか。

私は、その文にあつたように、中学生になって柔道部に入りました。高校、大学と柔道を続け、日本一を目指して頑張ったこともありましたが、残念ながら日本一にはなれませんでした。毎日頑張つて働く、父のような大人にはなれたと思つています。

ところで、みなさんは、詩や作文、日記などを書くことは好きですか。好きな人もいればそうでない人もいるかもしれません。私は詩や作文、日記などを書くことが大嫌いな子どもでした。でも、不思議なもので嫌いと思つて書いていたものが、今ではお金では買えない大切な宝物になっています。

みなさんも、今書いている詩や作文、日記などが、きっと未来の自分のお金では買えない大切な宝物になることでしょう。



土曜授業日「合唱コンクール」

大始良中(隅) 久徳寛 司

生徒の皆さん、合唱コンクールの発表ご苦労様でした。どの学級も素晴らしい歌声が響く発表でした。

今日は、これまで音楽の授業や学活・放課後の時間に、みんなで頑張って取り組んだ練習の成果を発表する機会となりました。また、土曜授業日にPTA活動と合わせ、大勢(多数)の保護者の方々に来校してもらって、生徒の皆さんの頑張っている姿を見ていただきました。合唱コンクールの醍醐味は、学級ごとにまとまり、各パートの音とりから始まって、何度も何度も声を出して歌い、歌詞をしっかりと覚えて練習を積み上げていきます。そして、本番ではクラス全員の歌声を重ね合わせ、気持ちを一つにして素敵なハーモニーを奏でることです。



今日の発表までに、たくさんの方の苦勞や努力があったと思います。係やリーダーの励ましやみんなの気持ちをまとめる声掛け、練習時間の確保や準備と片付け・連絡など、そういう努力の積み重ねが、本日の成果として発表した皆さんの姿に表れていました。

今回は、ピアノの伴奏で先生方の協力を頂いた学級もあったかと思えます。中学校は、自分たちの力で行事を作っていくことも大切です。頑張って練習したのであれば失敗してもいいと思います。その頑張りを学級の友達が応援し、努力を認め、支え合える思いやりのある声掛けができる学級をつくれる方がとても大事です。

よい学校とは、学年が上がるにつれて生徒が成長していける学校です。一年生よりも二年生、二年生よりも三年生が、自立して主体的な中学生らしい学校生活を送っている学校です。落ちていて堂々としている三年生の合唱は、それを証明するものでした。これからも体育大会や文化祭・高校入試に向けた学習の取組と三年生がよい方向に引っ張って行ってくれると思います。一学期も残りわずか一週間です。前回の全校朝会で話しましたが、「終わりよければすべてよし」という言葉があります。学習活動や宅習の提出、部活動、掃除等の学校生活の基本を全校で徹底して取り組み、「みんなで頑張ったね」と言える一学期にして締めくくりましょう。

話のひろば
あひま

魔法の二言

岩川小(隅)

森田勝二

二十年ほど昔、私は下甌島の小学校に赴任していた。三十代半ばにさしかかっていた私に、諸先輩方が管理職試験の受験を勧めてくださった。当時、小学校の教師になれただけで十分に幸せで、それなりに研修にも励み、島の子どもたちと楽しく過ごし、充実した日々を送っていた。そのため、管理職など考えたこともなく、また管理職としての自信もなく、かたくなに遠慮していた私に、当時の甌島駐在指導主事・K先生が、次のような話をしてくださった。



阪神の野村克也監督が新庄剛志選手を阪神の四番に据えたとき、OBから「新庄に阪神の四番は無理だ。」「阪神の四番にふさわしくない。」といった大きな批判や非難が寄せられた。すると、野村監督は、「阪神の四番という看板が、新庄を大きく成長させるんです。」と周囲を納得させた。

管理職というポジションが、森田さんを成長させてくれるよ。何より、森田さんのこれからの選択肢が広がる。

この最後の二言で、私は受験することを決意した。

確かに選択肢は広がり、学校教育とは関係のない知事部局や社会教育施設に向向することができた。特に、全国的なイベント事務局で、工労働水産部、農政部、環境林務部など、知事部局の皆さんとタスクフォースを組めたことは、大きな財産となった。当時の仲間が、かごしま国体・かごしま大会の事務局にいるが、延期のことを含めて苦労話を聞くことがある。そんな話を聞けるのもその時のつながりがあるからこそである。

管理職として成長しているのか分らないが、今後も諸先輩方の御指導を仰ぎ、保護者や地域の方々の御理解と御協力をいただきながら、職員一丸となって子ども一人一人に生きる力を育んでいく。

「管理職というポジションが成長させる。」
「これからの選択肢が広がる。」

至極単純な私にとっては、魔法の二言である。

「なりたい自分になれる」には

知覧中(南)

長野和己

真剣にワークシートにまとめている。非常に心地よい思いがする。

私の郷里は「種子島」、鉄砲伝来・ロケットの打ち上げで有名な島である。実家は、特筆する財産があるわけではない。だからだろうか、父から、

「自分が行きたい学校に進んで、生きていく力をつける。」

と口酸っぱく言われた。その一言があつたおかげで、私は親元を離れ、希望の高校で寮生活を送らせてもらった。そこで、すばらしい仲間を得ることができた。と同時に親のありがたみも身にしみて感じた。このことは、今となってみれば貴重な財産になったとありがたく思っている。

あれから、三十数年経ち、全校生徒二百四十八人に「なりたい自分になれる。」ように頑張っているとうと熱く伝えて自分がいいる。「なりたい」と思うことはとても大事である。もっと大事なことは、目標に向かって努力を続けることだと思ふ。このことを生徒だけでなく、PTA新聞でも保護者に向けて力説した。これからの混沌とした社会を、子どもたちがたくま

三年生の進路学習の一貫で、「高校調べ」の授業を参観した。生徒は、

自分が進みたい学校の情報について

しく生き抜くために、経済的な面はもろんのこと、真剣に子どもに寄り添い、親としての姿勢を見せてほしいという願いを込めて。

三年生の真剣な表情を見るにつけ、十五歳の頃や校長としての自分、親としての自分を振り返ることだった。自分も親として、我が子に語れるだけの教育を行ってきたか、正直わからない。でも、県外にいる娘と息子から、たまに「元気で頑張っているからね。心配はいらないよ。」というメールが届く。この言葉に救われている。

本当に、今は亡き父に感謝するばかりである。

「さ、ひっくり返そう。」

入来中(北)

洲上盛人

大相撲の前頭九枚目に炎鵬という力士がいる。身長百六十九センチメートル、体重九十二キログラムの小兵力士であるが、多彩な技を繰り出し、大きな力士を倒す姿は、大相撲ファンを魅了する。そんな炎鵬が私は大好きだ。

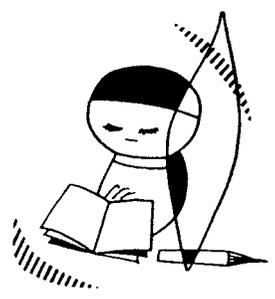
二〇二〇年元日の新聞にさこう・西武が、この炎鵬を使った全面広告を載せ話題になった。その広告にはこう書かれている。

大逆転は、起こりうる。わたしは、その言葉を信じない。どうせ奇跡なんて起こらない。それでも人々は無責任に言うだろう。小さな者でも大きな相手に立ち向かえ。誰とも違う発想や工夫を駆使して闘え。今こそ自分を貫くときだ。しかし、そんな考え方は馬鹿げている。勝ち目のない勝負はあきらめるのが賢明だ。わたしはただ、為す術もなく押し込まれる。土俵際、もはや絶体絶命。

なんだか否定的に感じる。しかし、この後に大きく「さ、ひっくり返そう。」と書かれている。

そこで、文章を左から読んでみる。不思議なことに実に肯定的な文章に変わる。炎鵬関にピッタリの魅力ある文章である。この広告のように、何事も逆転から考えること、逆の発想というのは大切だと思う。また、スケジュール管理も逆算して計画的に行うことが大事である。人生何が起こるか分からない世の中だ。今はうまくできていないと思っていることも十年ぐらい経ってみれば大逆転していることもある。生徒や職員に対し、勇気づけていくためにも「大逆転は起こりうる。」と信じて今を大切に生きることが自分自身が実践していきたい。

読書案内



■藤原 正彦 著

国家の品格

錫山小中(市) 加 治 寧

この本は、二〇〇五年に郵政民営化法案の否決を受け、当時の小泉内閣が衆議院を解散した年に発刊された。選挙の結果、行政改革の大きな柱として郵政民営化が成立し、経済のグローバル化が進展していくことになる。その頃、何気にこの本を手にした私だったが、グローバルズムや市場原理主義に対する懸念を論ずる藤原氏の考えに、とても共感を覚えた。

藤原氏は「論理は重要であるが、論理だけではだめ。論理的に得られた結論は盤石ではなく、人間にとって最も重要なことの多くが、論理的

に説明できない」としている。会津藩日新館の士の掟は、武士道精神に深く帰依している教えであるが、最も重要なのは「ならぬものはならぬ」とする結びの文句。本当に重要なことは、親や先生が幼いうちから押しつけないといけない。子どもは反発したり、後になって別の価値観を見出したりするかもしれないが、初めに何かの基準を与えないといけない。いじめを本当に減らしたいなら、大勢で一人をやっつけることは文句なしに卑怯であることをたたき込まないといけない。論理で説明できない部分をしっかり教えるというのが日本の国柄であり、そこに日本人の高い道徳性の源泉があるとしている。

また、「論理には出発点が必要」というところも興味深い。論理は、単純化して捉えてみると、AならばB、BならばCという形で、最終的に結論にたどり着く。しかし、出発点Aを考えてみると、Aは常に仮説であり、この仮説を選ぶのは論理ではなく、それを選ぶ人の情緒である。情緒とは論理以前のその人の総合力だとしていえる。出発点を選ぶのは論理ではなく、情緒や形。論理は重要であるけれど、出発点を選ぶということとは、それ以上に決定的だということである。

藤原氏は、日本人の持つ情緒や形を、大事にしなければならぬという。この本には、これ

からの変化の激しい時代だからこそ、考え方の出発点として大切にしたいヒントがあるように思う。

新潮新書 六八〇円

■向田 邦子 著

眠る盃

野間小(熊) 永山 達 治

野間小学校が教職九校目の学校となる。これまで、それぞれの学校で、それぞれの地でたくさんの人と出会い、たくさんのお出来事があつた。笑つたり、喜んだりしたことの方が多かったと思うが、つらかったことや、悲しかったことがなかつた訳ではない。しかし、振り返ってみると、懐かしい思い出であり、大切なことを教えてくれた時間であつたと感じている。

著者は、小学生時代のおよそ二年間だけの鹿児島生活であつたが、随筆集には、鹿児島の話が多く掲載されている。そして、「鹿児島はなつかしい『故郷もどき』なのであろう」と、鹿児島への深い愛情も伝えている。

鹿児島への二泊三日の旅を綴つた「鹿児島感傷旅行」。著者が大病を患い、万一再発し、長く生きられないと分かつたら、鹿児島へ帰りたい、との思いで帰つてきた旅行である。天文館、天保山、某老舗デパート、じゃんぼなど、お馴染みの名前が出てくるが、多くのものになつたり、変わつたりしてたと書いてある。寂しさを感じた著者であつたが、昔と変わらないものが二つあつた。桜島と人である。特に桜島への思いは強く、当時住んでいた家に着くまで、桜島を見ないようにした。少女時代と同じように、あのうちの、あの庭から桜島を見たこと思つたからだ。

教職に就いたことで、私にも、懐かしい「故郷もどき」が県内にいくつかできた。その地を久しぶりに訪れると、その頃の気持ちになる。昔と様子が変わっていると、なぜかがっかりする。昔のままだとほっとする。大切な思い出はそのままに、という自分勝手な思いなのかもしれない。「故郷もどき」は、いつしか、私の心の拠り所になつていっているのではないかと思う。時の流れには逆らえず、このような気持ちを味わえる場所は、私もわずかとなつてきた。これからも、種子島、野間小での出会いと経験を大切にしていきたい。

講談社 六四〇円

■館野 泉・中村 桂子
加古 里子・松居 直 著

リレートーク 言葉の力 人間の力

住吉小(大) 中原 明 美

本書は、平成二十三年三月七日、東日本大震災の直前と災害後に昭和十一年生まれの館野泉さんと中村桂子さん、昭和元年生まれの加古里子さんと松居直さん、異分野の先達四人による「リレートーク」である。

フィナンランドを拠点に活躍している「左手のピアニスト」として知られる館野さん、見事な科学絵本で子供たちを惹きつける理学博士の中村さん、工学博士で「だるまちゃん」「からのパンやさん」などの絵本作家で知られる加古さん(平成三十年没)、「こどものとも」「かがくのとも」の生みの親で子供たちとの生活の基盤を作つてくださった福音館書店創業に参画した松居さんによるリレートーク集であり、教育や原発、戦争など、様々な経験を積んできた四人だからこそ語れる生き方で、次の世代には是非伝えたい、人間として多くのことを学べる一冊である。戦後七十五年、原発事故から十年を

迎え、コロナ禍を抱える今だからこそ、この書から教えられるものは多いと実感する。

中村さんと館野さんの「命の始まり、音のゆくえ」の第一章から始まり、第五章まで編成されている。

人間は自然の一部であり、その時代時代で子供は変わるが、いつまでも心に残る言葉や絵を伝えたかったら、本当にそれを願うなら、大人が生活そのものを変えていかないとだめだと思ふことや絵本は大人が子供に読んでやるものだということ、学校教育よりも家庭教育が大切だということなど、厚い本の中には現代と変わらない社会的背景と課題があることに気付かされる。

だから、遊びという直接体験で子供は感じ、学び、大人は豊かな「言葉」を使い、一緒に体験活動をするのを、家庭や地域、各種団体と連携・協働して共に学び直したいと思っている。

佼成出版社 一五〇〇円＋税



■吉村 昭著

漂流

市来中(郡) 市園 誠

現在、日本だけでなく世界中に流行している新型コロナウイルス。そのような中、私たちは「新しい生活様式」を取り入れ、感染を予防しながら生活をしている。思い返せば、非常事態宣言が出され、学校が臨時休業になった二月の頃、誰が今の状況を予想できただろうか。しかし、我々は負けてはいられない。このような状況においても、自分を律し、「また元の暮らしを取り戻そう。」と皆、我慢をしながら頑張っている。とは言え、これまで普通に、当たり前に行われていたことができなくなったことの心身への打撃は、人によって違いはあれ、多かれ少なかれある。いかにこれまでの生活が幸せであったことかを改めて痛感させられる。

さて、本書は、江戸時代の一人の漂流者の記録に基づいて書かれた小説であり、四国土佐の船乗りである主人公「長平」の乗船する船がある日、次々と襲い掛かる激浪に揉まれ、船が大破し、水も食料も底をつき、どことも知れない孤島(実際は「鳥島」)に流れ着く。生きる

希望さえもてないどん底の状況から、唯々、日本に帰ることだけを切望し、何も無い絶海の孤島で自然や自身と格闘し続ける物語である。読み手に「生きることがいかに難しいことなのか。」「生きるとは何なのか。」を問いつつ、絶望的な状況に追い込まれても決して生きて帰国することをあきらめない、凄まじい人間の執念深さを描いた小説である。生きるためには、水や食料、道具等が必要であり、これらを手にするために、生きたいと渴望する気持ちが、極限に追い込まれた人間の知恵や行動力を生んでいく。このことは、今を生きる私たちにあきらめない心と強い勇気を与えてくれる。また、人は弱く、一人では生きてはいけず、悩みや苦しみを共有し、支え合いながら生きられるものだと改めて教えてくれる。現状の終息は見えないが、皆が協力し合えば「まだ大丈夫。きつと出口は見える。」と連想させてくれる作品である。

新潮文庫 八〇〇円



教職生活三十七年目。ついに定年退職の年を迎えた。来年の三月まで秒読み段階に入った。

八人兄弟の末っ子として、おまけに男と女の双子でこの世に誕生した。姉が結婚し、子どもが生まれ、小学校六年生で「叔父さん」になった。今では甥・姪十二人である。中・高時代、お盆や正月は甥・姪の世話に追われた。「お兄ちゃん」と呼ばせ、決して「おじさん」とは呼ばせなかった。小さい子どもと遊ぶのがいつの間にかうまくなった。

小学校時代に夢中になったのは「鉄腕アトム」や「仮面ライダー」である。白衣を着た科学者がフラスコや試験管からモクモクと白い煙を出しながら実験する姿に憧れた。将来は科学者になりたいと思った。

中学・高校時代は、部活動のバレーボールで汗を流した。

セッターを任せられ、チームのアタッカーに打ちやすいトスを上げるべく、技術を磨いた。尊敬する指導者との出会いがあり、いつしか教師になり、部活の顧問をやりたいと考えようになった。この頃、短距離よりも長距離の方が得意で、地域の駅伝選手に選ばれて大会に出場することもあった。県下一周駅伝の初日のゴール地で生まれ育ったこともあり、毎年、県下一周駅伝の頃になると落ち着かなくなる。

大学は、学校の教員になることを目指し、教育学部に入學し、白衣を着て実験する理科を専修した。卒業論文は、なぜか宇宙環境について

書いた。星の誕生や星の一生など宇宙に関することにも興味があったからである。

教師として初めて赴任したのは、「世界自然遺産」の屋久島であった。宮之浦岳・縄文杉への登山や永田浜で見たウミガメの産卵、ヤクシカ・ヤクザル・トビウオ・ゴマサバ・大自然を満喫した。少年団やママさんバレーの指導にも精を出し、週末も若さに任せてフル回転であった。

二校目・三校目でも、大声を張り上げて少年団の指導を続けた。担任は、高学年が多くなった。研究教科が理科ということで、理科専科、

縁は異なるもの、味なもの

趣味・文芸

前之浜小(市) 松木田 金 悟

社会教育で赴任した内之浦、教頭として、そして校長として赴任した種子島は、ロケットの打ち上げ基地がある。ロケットの打ち上げ成功を祈念して婦人会の方々と千羽鶴を届けた内之浦。夜中でも明け方でも打ち上げを見に行った種子島。カウントダウンが進む緊張感、打ち上げ後のあの轟音と空振動は、何回体験しても感動である。とても恵まれていた。

さて、定年を間近に控えた今、趣味として挙げられるのは、花作りである。緑化担当の経験が生きている。春咲き、夏咲きの花の種を買いに行き、冷蔵庫に入れたり、水に浸したりした後、ピート板やトレーに蒔き、発芽を待つ。発芽率がいいと自己満足に浸る。かれこれ十年ほどに

緑化担当を任せられるようになった。花の名前もろくに知らず、植物を育てることは縁遠い人間であったが、種を蒔き、仮植をし、学級園・学校園、行事を彩る鉢植えの世話をするという経験を通して、その喜びを知ることができた。

二校目で熊本大学での社会教育主事講習を受け、四か所目、五か所目では社会教育の仕事に携わった。そんな中、二月になり、県下一周駅伝の裏方の仕事を手伝う機会に恵まれた。

選手の配置や荷物運搬などである。期間中の各チームの選手・スタッフ・関係者の努力や苦勞を目の当たりにすることができた。

これまで歩んできた道。生い立ちや出会い、様々な体験や出来事が絡み合っ、人生は実に面白い。



結い つなぐ まち 瀬戸内

古仁屋中(大) 竹ノ山 誠 忠

一 瀬戸内町の概要

瀬戸内町は、奄美大島の南部に位置し、大島海峡を挟んで、加計呂麻島、請島、与路島といくつかの無人島からなっている。平地が少なく面積のほとんどが山林で占められ、沿岸部はリアス式海岸で形成され、複雑に入り組んだ入り江は天然の良港として利用されている。大島海峡を意味する「瀬戸内」を町名に、東シナ海に囲まれ海の恩恵に与ってきた海洋の町である。

嘉鉄ブルーと称される美しい珊瑚礁の海には、海底にミステリーサークルを描くアマミホシゾラフグが発見され、亜熱帯照葉樹林に覆われた森には、アマミノクロウサギやルリカケスなどの希少な動植物が生息している。世界でも類を見ない豊かな自然を未来に残す世界自然遺産登録が待たれる。

主な産業は農業と漁業で、サトウキビやタシカンなど温暖な気候を活かした栽培が盛んで、特にパッションフルーツは、「瀬戸内パッ

ション」として地域ブランドを推進している。周辺海域では、一年を通じてあらゆる種類の魚介類が水揚げされ、海峡を利用したクロマダロの養殖は国内有数の生産を誇る。

町内には五十六の集落が点在し、それぞれ特徴のある伝統や文化をもつ。歌詞や踊りが多様な島唄や八月踊りをはじめ、国指定重要無形民俗文化財「諸鈍シバヤ」などの民俗芸能が伝承されている。また、浜下りや豊年祭など集落民が集い賑わう旧暦で行う行事を大切にしている。

二 古仁屋市街地

国道五十八号を南下して地蔵トンネルを抜けると古仁屋市街地が広がり、少ない平地と埋め立て地に事業所や商店、団地が建ち並び、過密した景観になっている。現在、瀬戸内町の人口は約九千人で、半数以上を古仁屋が占める。

古仁屋は、戦時中に空襲で焦土となり、それから約十年後、街がほぼ全焼する大火に見舞われ、さらに平成二年の豪雨では大規模な土砂崩れが発生して、多数の犠牲者が出ている。台風の常襲地でもある古仁屋は、幾度となく災害を乗り越え、復興してきた街である。

三 戦争遺跡

明治以降、地理地形のよさから日本軍の要所として重要視され、集落に多くの施設が造られ今もその遺跡が残る。手安の弾薬庫跡や安脚場戦跡は見学しやすいように整備されている。呑之浦震洋基地は、隊長を務めた島尾

敏雄の「出発はついに訪れず」の舞台で、格納壕跡には特攻艇のレプリカが置かれている。古仁屋には、陸軍部隊の施設が構築され、現在の古仁屋高校の敷地には奄美大島要塞司令部、本校には陸軍病院が置かれ、南方からの傷病兵や近海で撃沈された船の乗員乗客を収容し治療を行っていた。

古仁屋小学校前に、潜水艦の魚雷を受け三千七百名余りが犠牲になった富山丸の供養塔がある。生存者の弔魂の辞には、救助にあたる町民の様子が刻まれ、結びには「古仁屋町民の救護活動に国防婦人会の負傷者の看護に尽瘁された偉大な功績を後世に伝えるよすがとしたい」とある。語り継がなければならない歴史がある。

四 おわりに

瀬戸内町には、互いに助け合い、尊重し合いながら生きていく「結い」の精神が脈々と息づいている。

本校では、奄美世から大和世へと続く歴史を学び、島口や島唄を習い、「くばぬ若くば」などの八月踊りを体育大会で披露している。また、手こぎの舟で大島海峡を横断し、先人の苦労や生き方を学んでいる。

今後も、「結い」の精神や学校教育目標に掲げる「ストグレ魂(何くそ負けてたまるか)」を育み、ふるさとに誇りを持ち、貢献できる生徒の育成に努めたいと思う。

(参考資料…町政施行六十周年記念要覧)



*** ころの詩 ***

時無草

秋のひかりにみどりぐむ
 ときなし草は摘みもたまふな
 やさしく日南にのびてゆくみどり
 そのゆめもつめたく
 ひかりは水のほとりにしづみたり
 ともよ ひそかにみどりぐむ
 ときなし草はあはれ深ければ
 そのしろき指もふれたまふな

室生犀星

一般財団法人校長会館だより

教育長異動

○再任 令和二年十月一日付
 与論町 町岡光弘氏

季節の言葉 「夜長」

よそに鳴る夜長の時計数へけり 久女

秋の夜の長いことをいう。秋分が過ぎると、昼よりも夜が長くなり気分的にも、夜の長さが身にしみる。残暑もなくなり、夜業や読書にも身が入る。春の「日永」に対応する季語である。関連する季語に「日短」があるが、「夜長」は秋の季語で「日短」は冬の季語である。



編集

後記



ラグビー・ワールドカップ日本大会が開催されて一年が過ぎます。チーム・ジャパンの応援に国中が沸き返っていたことが昨日のように思い起こされます。

私も高校生から社会人までラグビー・チームに所属していました。汗と土にまみれ、楕円形のボールをひたすら追い続けた思い出や、監督とチームメイトへの感謝の気持ちは今でも忘れることができません。

「身を挺してボールをつなげ。」「ボールをもつたら一歩でも前へ進め、真つすぐ走れ。」「スクラムを組む際は、必ず相手より先に態勢を整えよ。」「ラグビーでは、防御は最大の攻撃なり。」「全力を尽くした試合終了後に、互いを称え合うノースイドの精神がある。」「など、高校時代のラグビー部の監督から叩き込まれた言葉は、今でも心と体に刻まれており、学校経営・教育指導の面においても自分の指針となっています。

今年の四月、本校に着任した際、御年七十歳になられた当時の監督から「学校と子どもたちのために全力を尽くせ。」との叱咤激励の電話をいただき、身が引き締まるとともに、今でも忘れずに見守ってください。恩師の心にあふれ、目頭が熱くなりました。

今月も御多用の中、玉敲をお寄せいただき、誠にありがとうございます。執筆者の皆様には御礼と感謝を申し上げます。

本年度もいよいよ後半戦を迎えようとしています。各学校の学校経営及び教育活動のますますの充実と会員の皆様の御健勝を心から御祈念申し上げます。編集後記といたします。

原崎 竜一（谷山北中学校）